

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 米大統領の英語 (22) (A Basic Way of Reading Trump-Language)

後 藤 寛

2020 年 4 月上旬現在、連日メディアは中国の武漢市から全世界に広がったとされる新型コロナウイルス感染症(coronavirus disease)の新情報を次々と提供している。相当な数の感染者と死者の出る事態で日本での感染状況も深刻となっているが、WHO (世界保健機関) は 2019 年末に最初に確認されたこの the coronavirus disease を、‘COVID-19’ [kóuvid wʌn nain] と名付けた。目下、米国での感染者が最も多いが Trump 大統領はこれを Twitter で the Chinese Virus 「中国ウイルス」と称し驚いたが、彼らしかった。

Basic ではこの「ウイルス、病原体」も広義には poison ではあるにせよ、「新型コロナウイルス」は定義的には the new sort of very small and unseen disease-causing living things named ‘corona’、一般的には the new ‘coronavirus’, or very small and unseen disease-causing living things のように言えばよい。そもそも「伝染病」の an infectious disease / a contagious disease を Basic で簡素に言うなら、a disease going from one person to another ということになる。

新型コロナウイルス感染症は地球の反対側の南米にも流行し、最初の感染者が出たのはブラジルであった。本連載(19)の(2)で触れたが、南米アルゼンチンの首都 Buenos Aires (ブエノスアイレス) はスペイン語の Buenos = good、Aires = air からで「良い空気」の意味である。空気が良い？ならアルゼンチンには感染者は出ないのか？と思っていたらその後やはり流行し、実は中南米での初の死者が出たのもこのアルゼンチンであった。

世界的な感染病{pandemic < pan (= all) + dem (= men and women / プラス α Basic 語 people) + ic}、そして本連載で考えている PIE etymon (印欧祖語の語根音素形) から見る形態音素論的(MP: morphophonemic)な「音と意味」に関連しここで触れておくが、歴史的に 14 世紀半ばに欧州全土にペスト (黒死病: the Black Death) が蔓延し、3 年間ほどで死者が約 2,500 万人出て、欧州の総人口が 1/3 程度まで激減したと言われているが、実はこのペストによる人の移動がゲルマン系言語の英語音にも大きな変化をもたらせた。英語史でいう有名な Great Vowel Shift(大母音推移)がこれである。

この中世の感染症ペスト (黒死病) が原因となった英語の母音変化とともに、もう 1 つ感染症とは関係ないが英語史でよく知られるものがある。紀元前 10 ~ 4 世紀のほぼ 600 年間に印欧祖語(PIE)からゲルマン系言語への派生の過程で起こった規則的な子音変化で、これが 19 世紀にドイツの J. Grimm が発見したいわゆる Grimm’s Law(グリムの法則)である。母音と子音に起こったこの音変化の歴史的な見方が本連載の背景に 1 つある〔このあたりの学説の解説は拙著(2016)、松柏社、第二部、pp.81-84 参照〕。

ここで改めて確認しておくが言語学史的に上記、音素(phoneme)は structural linguistics (構造主義言語学) の研究上で発見された画期的な概念であり、この音素の発見で言語音声と意味の研究は一挙に飛躍した。本連載は元々は同上拙著の趣旨に基づいているが、この同上拙著の着眼の原点は筆者が 1960 年代初頭の学部学生時代に、アメリ

カの構造主義言語学者 Bloomfield, L. (著) *Language* (1933)の日本語翻訳版『言語』(1962)の抜粋文を、ある日スキャン読みをしていてハッとし興味を抱いたことにある。

同上拙著に基づく本連載のさらに別な背景にはもちろん Basic の言語哲学 **orthology** : **the science of the right use of words** がある。本連載は初回の(1)からすべて有機的なつながりをもっているが、この「純正学、純正語法論」としての伝家の宝刀 Basic 哲学には常に発見があり、発見の連続となる。英語という言語に関わる限り、その魂を培い、血となり肉となる。今回もこのあたりを背景にさらに考えてみる。

書き物がその場かぎりで読み捨てられたり、あるいは単に一覧だけで放置され、忘れ去られるものは多い。そもそも新聞などはそうである。時事英文は正式で格調の高い文体で書かれるが、Trump 大統領の英文は略式で、くだけた、カジュアルなメディア英語文例として貴重で、読み捨てや単なる一覧はもったいない。現在もネット上にすべて残っているし、永久に歴史にも残る公文書である。特異な部類に入る一種の略式ビジネス通信文例のようなものでもあり、繰り返しの読み込みで何かと思索に値する。

いわゆるビジネス通信文(business correspondence)はすべて3つの深層意味素(deep sememes)としての **i) <ABOUT>**, **ii) <BECAUSE>**, **iii) <PLEASE>**を必ずもっている。今日ネット上で交わされる一般のメール通信も、実は同じ構造型となる。すなわち i)「～の件」、ii)「～であるので」、iii)「～を頼みたい」である。Trump 大統領の tweets も突き詰めれば、ほぼどれもこの3つの深層意味素 ABOUT, BECAUSE, PLEASE (Basic 語でもある)に集約される形でつぶやかれる政治的・ビジネス的交渉文にも思える。

「交渉」と言ったが、英語の negotiation は{neg (= not) + oti (= time-off) + ation}で、「余った時間のないこと、断続的でないこと、次々と進めること」のような原義をもつ語である。このあたりからもビジネス的「交渉」のもつ本来の姿も見え隠れする。

前回は12月24日(2018年)のクリスマスイブの tweet を扱った。今回はまずは(1)で翌日25日のクリスマスの tweet を見てみる。(2)は新年直前の tweet であった。

(1) I hope everyone, even the Fake News Media, is having a great Christmas ! Our Country is doing very well. We are securing our Borders, making great new Trade Deals, and bringing our Troops Back Home. We are finally putting America First. MERRY CHRISTMAS ! #MAGA (December 25, 2018)

▲Trump 大統領の思いということになるが、これぞまさに大統領在任中の一期半ばのクリスマスの日に締めくくりとして彼が言いたかったことを簡潔に集約したものと言えよう。この文に2年間の思いがほぼすべてキーワードで散りばめられている。

White House のスタッフがどこまで関わっているか断定はできないのでそれは別にしても、まさに Trump 風の大文字化、感嘆符付けの tweet である。2つ目の下線の中の Country であるが、本連載(11)での tweet の解説ですでに言ったように Trump 大統領は 自国の米国の意味では大文字書きの Country とする (ただし、珍しく実は本連載(12)で見た tweet では country としていた)。一方、他国のことは必ず小文字の c で country, countries とする。下の(2)の tweet でもこれが確認できる。

上で i) <ABOUT>, ii) <BECAUSE>, iii) <PLEASE>の3つの深層意味素を提示したが、これに基づいて上の tweet 文を分析すれば、**i) ABOUT** (件名) : わが国アメリカ(Our Country/America)の現状、**ii) BECAUSE** (理由) : 国境(borders)の安全対策、新貿易上の取引(new Trade Deals)、また (過激派組織「イスラム国 : IS」掃討作戦のためシリアに派遣中の) 米軍部隊(our Troops)の撤収は順調に進み、米国(America)第一主義を貫いているので、**iii) PLEASE** (依頼・願望) : 偽メディア(Fake News Media)を含め国民全員(everyone)が今日はクリスマスを祝う(Merry Christmas !)と同時に、今後「米国を再び偉大に」(MAGA)のモットーの下で協力して欲しい、という内容になる。

こういう分析法は Trump 大統領の tweet 文例ばかりでなく、すべての通信文は基本的にこの3つの Basic 語でもある深層意味素を備えていると考えてよい。

なお、付け加えておくが、昨年10月末にシリアの米軍部隊は IS(Islamic State)の Abu Bakr al-Baghdadi (アブバクル・バグダディ) 最高指導者を、軍用犬を用いた急襲作戦で死に至らせた。これには Trump 大統領も大満足で、大きなニュースとなった。

語としては太線とした troop だけを見ておこう。文中の他の語はほぼすべて、これまでにすでに扱った。troop は Basic 語の **army, military**、さらに un-Basic 語の militia, soldiers などと類義語(synonym)ではあっても、同系語(paronym)ではない。

それぞれ troop (軍団)、army (一国の軍隊)、military (正規軍隊)、militia (民兵)、soldiers (兵士)などと便宜的に日本語をあてがってみても、なお明確さを欠く。やはり起源としての印欧祖語(PIE)までさかのぼり、上記 MP (形態音素) 的に根っからの原義に迫る必要がある。戦士はすべて warriors であるし、Basic で言うなら fighters in a war でもあるが、「軍人、軍隊」を意味する上記語の明確な分類は必ずしも容易ではないので、同上拙著では語釈上で発展性のある army と soldiers だけを扱う形にしておいた。

troop は PIE etymon (印欧祖語語根音素形) の /TREB/ からとされ、「簡素な舎やテントを張った屋形で一団となって暮らすこと」のような意味から来たらしい。troupe (〔興行物などの〕一座) は同系語なので、これの語感に近いと考えればよい。さらに印欧祖語の語根音素形、すなわち上記 morphophoneme (MP : 形態音素) からすると案外、本連載(6)の例で扱った /TREI/ (/TRI/) からの「3」が原義のプラス α Basic 語 **tribe** (部族) [有史以前の3部族] などともつながっているかもしれない。今後さらに追ってみたい。

一方、soldier は「1つに固まっていること」を意味する PIE etymon /SOL/ から来たとされ、Basic 語 **solid** と同系となるが、さらに「苦味のあること」を意味する PIE etymon /SAL/ と同根元ではつながっているだろう。Basic 語の **salt** (塩)、プラス α Basic 語で塩味のある **salad** (サラダ) などとも関連がある [本連載(10)の(1)参照]。古代ローマ時代になると兵士が塩を買うための給料として銀貨が与えられたことから soldier は salary (給料) と同系である [同上拙著、第二部、例(41)、および例(78)解説参照]。

arm, harmony などとも同系の Basic 語 **army** は印欧祖語の音素形 PIE etymon が /AR/ だとして、本連載(4)の②、(12)、(13)ですでに扱った。「連なっている、つながっていること」が原義である。**military** は army と比べると、より法的ニュアンスの強い語感をもっていると言える。army は an army of ants (アリの大群) のように「連なった

群れ」の意味ともなるが、この場合 **military** とは言えない。

さらに付け加えておくと、PIE etymon (morphophoneme : MP)の/AR/からの同系語として **Aryan / Aryanize** [アーリア人／アーリア人化する (ユダヤ人を追放する)] という語も生まれた。これはナチス・ドイツの独裁者 **Hitler** (ヒトラー) の人種的差別・偏見、すなわちドイツ系民族であるアーリア人の直系が人種的に優れているという考え方と結びついている。古くは中央アジアに住み、後にイラン・インドなどに安住したと言われる アーリア人(Aryans)が実は印欧祖語民族の総称でもある。このあたりは本連載(18)でも若干触れてはおいた [さらには同上拙著、第二部、例(31)参照]。

上の tweet 文は having, doing, securing, making, bringing, putting と 6 つの-ing 接辞が連続的にリズムカルに並び、文全体としても英語リズムの isochronism (等時性) を感じさせる tweet である。**強音の数で決まる英語リズムの isochronism** は英語音声の魂であるが、日本語民族の聴覚脳ではこのリズムが保てなく英語音声を取捨するもの、発するものも拍子抜けとなる。

(2) Honduras, Guatemala and El Salvador are doing nothing for the United States but taking our money. Word is that a new Caravan is forming in Honduras and they are doing nothing about it. We will be cutting off all aid to these 3 countries — taking advantage of U.S. for years ! (December 28, 2018)

▲無意識に書かれたこの tweet は caravan, aid, advantage の 3 語は Basic の範疇以外の語であるが、Basic 文にかなり近い。しかしこの文から Trump 大統領の英語は Basic 的だなどと、またもや早合点されてはならない。本連載(2)の冒頭ですでに言ったことで繰り返しになるが、near-Basic はどこにもある。near-Basic は Basic ではない。Basic は英語の魂であるがゆえ、どんな英文にも Basic 的なところは現れる。

カタカナ語にもなっている caravan (移民集団・キャラバン) はアラビア語経由の語である。advantage は本連載(11)の例で見た。なお、ここでの taking advantage of U.S. は第一文での taking our money の換言である。

太線の語 aid {a (= to) + id (= help)} (援助) は後ろの to との共起で意味は推測できる。ラテン系の語で、同系語に aide (アシスタント)、adjuvant (援助の・補助) がある。スペイン語で ayuda は「援助」の意味である。なお、国名の El Salvador に関しては本連載(14)の(2)で触れた。上の(1)で言ったが米国以外の他国、ここでは中米の Honduras, Guatemala, El Salvador のことを小文字書きで these 3 countries としている。

文内容を 3 つの深層意味素で 3 拍子的に分析・整理すれば、**i) ABOUT** : 中米のホンジュラス、グアテマラ、エルサルバドルの 3 国、**ii) BECAUSE** : ホンジュラスでは国境を越え米国側へ来る新たな移民集団があるらしいし、この 3 国は長年に渡り米国を利用しているだけであり援助は取りやめるので、**iii) PLEASE** : そのような処遇を理解して欲しい、となる。この見解・発言による効果・影響は pragmatics (語用論) のレベルとなる。